アントレプレナーの生き方（2）～ジェームズ・ダイソン　その２～

みなさんは、「羽根のない扇風機」をご存じでしょうか。写真のとおり、この特徴的なデザインの扇風機を最初に開発したのも実はダイソン氏なのです。ダイソン氏は、扇風機の中央に構える大きな羽根の存在に疑問を感じていました。誰もが当たり前に思っているこの扇風機の形状を、変えることができるのではないか、と。実は大きな羽根がなくとも風を起こす技術があることは昔から知られていて、ダイソン氏が発明したわけではありませんでした。実際にダイソン氏は、「ハンド・ドライヤーを調べている過程でこの羽根のない扇風機のアイディアを思いついた」と語っています。前号で紹介したダイソンの掃除機に使用されているサイクロン方式も、昔からあった技術で、ダイソン氏がゼロから生み出した発明ではありません。しかし、もともとあった技術を活かして、それを掃除機に応用したり、扇風機に適用して、新たな形へと変えていく。徹底的に試行錯誤を繰り返すことで、諦めることなく粘り強く開発していく。ダイソン氏のこうした信念が「ダイソン」というベンチャー企業を生み、今では、世界中の人々の生活に驚きを提供しているのです。

羽根のない扇風機
【提供　ダイソン株式会社　】

千代田区麹町にあるダイソン（株）日本法人のビルを訪れると、エントランスにはダイソンの掃除機等の自社商品はもちろん、なぜかホンダの「スーパーカブ 50」が展示してあることに気がつきます。これは、ダイソン氏がもともとホンダの「スーパーカブ 50」を愛用していたことに由来するものですが、その他にも、ソニーのウォークマン等、ダイソン氏は日本のものづくりに対する強いリスペクトをたびたび表明しています。創業してまもなく日本に進出したダイソンですが、家電文化が既に成熟していた日本市場を舞台に、小さくて精巧なものを好む日本人の嗜好に触れた経験は、その後の製品開発に活かされていきます。

一例を挙げれば、日本の家庭をターゲットとした掃除機は、躯体を A4サイズにおさめることを求められました。パワーを維持したままコンパクト化することは困難を極めましたが、その結果として、ダイソンは世界初の「デジタルモーター」という独自の技術を手にすることになりました。

サイクロン式掃除機
【提供　ダイソン株式会社　】

その独自のモーターの技術をもって、ダイソンは 2016 年に美容家電部門に進出します。ダイソンが選んだ商品は、ドライヤーでした。ぽっかりと穴のあいた不思議な形は、ヘアドライヤー界に革命を起こしました。　この斬新な形状の秘密は、風を起こすためのモーターがハンドル部に格納されていることにありました。一般的なドライヤーのモーターはヘッド部分の内部にあるため、「頭でっかち」な形になりがちで、ユーザーが使用する際には疲労の原因にもなっていました。しかしダイソンのドライヤーはヘッドが軽いために重量バランスがよく、身体に負荷がかかりません。これを実現したのは、単1電池ほどの大きさで重さはたったの 49g、それでいて1分あたり最大 11 万回転できるというデジタルモーターのおかげでした。取り込んだ空気は、「羽根のない扇風機」で培ったダイソン独自のエアマルチプライアー技術によって 3 倍に増幅され、高圧・高速の気流を生み出します。ちなみに、「Dyson Supersonic ヘアドライヤー」が最初にお披露目されたのも日本でした。

Dyson Supersonic ヘアドライヤー
【提供　ダイソン株式会社　】

ダイソンはその他にも、「Dyson Zone™　空気清浄ヘッドホン」のという大変ユニークな製品も開発しています。これは、ノイズキャンセリング機能を搭載した高品質のヘッドホンと、口元を覆うタイプの空気清浄機が一体化したもので、見た目にはかなりインパクトがあり、革新的でありながらもチャレンジングな商品となっています。一方で、浄化された空気を吸い込みながら、騒音がシャットアウトされた状態で音楽を楽しむことができるという製品コンセプトは、世界中の都市部で生じている課題をしっかりと捉えて、質の高いパーソナル空間を希求する時代の要請に応えたアイディア商品であるとも言えるでしょう。

ダイソン氏は、ダイソンがこれほどにも革新的な製品を次々と世に出し続けられる要因のひとつに、「ファミリーカンパニー（家族経営）であること」を挙げています。現在も、チーフエンジニアとして同社を率いるダイソン氏とその息子のジェイク ダイソンですが、特にジェイクは、先ほど紹介した空気洗浄ヘッドホンについても、「大気汚染や騒音など、屋外の生活環境は今後さらに悪化すると予測できた。成功の保証なんてないが、自分たちが持つ技術を用

いて問題解決できるなら挑戦しよう」と語っています。さらにジェイクは続けて、「家族経営だからこそ、価値があると確信したら取り組める。羽根のない扇風機も、何百万台も売れるなんて想像もしていなかったが、新しい市場を生み出し、さらに発展して空気清浄機へとつながった。やるべきことにリスクを取れるのが私たちの会社だ」と言いきっています。

このように、ダイソンは単なる「掃除機メーカー」ではなく、自分たちが持っている技術によって新しい市場を創出し、魅力的な製品の供給を通じて、身近な生活から社会問題に至るまで、さまざまな課題を解決していこうとしているのです。

農業開発
【提供　ダイソン株式会社　】

そんなダイソンが現在熱心に取り組んでいる事業の一つが、農業です。イギリス・リンカンシャー州キャリントンにある「ダイソンファーミング」では、最新のテクノロジーを駆使して、小麦や大麦、ジャガイモ、タマネギ、エンドウ豆等を栽培しており、単一生産者としては英国最大級の規模を誇っています。また、嫌気性消化装置（トウモロコシやまぐさなどの生分解性物質をバイオメタンに転換する）から得られる電力や熱等を使って、巨大な温室でイチゴの栽培も行っています。すなわち、作物を育て、廃棄物を回収し、ガスを発生させることで、それを今度は発電機の燃料にする。そしてその発電機の熱を使って温室を温めたり、穀物を乾燥させたりもする。イチゴ栽培に必要な熱と電力は、サステナブルな方法で農場から自足しているという訳です。ダイソン氏は、このモデルをイギリスのみならずいずれ世界に展開できると言います。

ほんの 30 数年前、あふれ出るアイディアを形にするためにサンプル機一つを抱えて日本行の飛行機に乗ったイギリスの青年が、今や東京ドーム 70 個分ほどにもなる 2 つのテクノロジーキャンパスを持ち、シンガポールの本社をはじめ、マレーシア、フィリピン、中国、ポーランドなどに研究開発拠点がある巨大グローバル企業のトップとして、テクノロジーの最先端を走り続けているのです。

2024 年から稼働予定のシンガポールの新工場では、次世代バッテリーの先進的製造拠点となるほか、ロボットや人工知能（AI）の研究にも取り組む予定だと言います。ダイソンはこれからも、スタートアップの精神、すなわち実験し、学び、冒険する自由をもち続けて、世界をあっと驚かせる製品を発表し続けるアントレプレナーであり続けるのでしょう。

ダイソン氏と息子のジェイクの写真
【提供　ダイソン株式会社　】